

## 幼児の不安傾向とその関連要因の検討 —改訂版幼児用不安傾向評定尺度の作成—

筑波大学大学院人間総合科学研究科\* 西澤 千枝美

### Young Children's Anxiety Tendencies and their Correlates: Construction of Revised Version of Rating Scale on Young children's Anxiety Tendencies

Graduate School of Comprehensive

Human Science, University of Tsukuba NISHIZAWA, Chiemi

#### 要 約

本研究では、幼児の不安傾向を不安障害の分類に従い多次的に捉えることのできる尺度を作成し、信頼性・妥当性の検討を行うことを目的とし、幼児用不安傾向評定尺度（西澤・濱口，2010）の再検討を行った。その結果、従来の尺度と同様の4因子（「F1:社会不安」、「F2:全般性不安」、「F3:分離不安」、「F4:特定の恐怖」）構造からなる28項目5件法の保護者評定用の尺度が作成され、従来よりも高い信頼性・妥当性を備えていることが確認された。また、CBCLの得点との関連から、本尺度の各下位尺度得点が臨床的に意味を持つ基準が明らかにされた。

さらに、作成した尺度によって、幼児の不安傾向における性差・学年差を検討した。その結果、「社会不安」は年少児、年中児で高く、「全般性不安」は年長児で高く、「分離不安」は低学年ほど高く、「特定の恐怖」は女子と年少児で高いことが示され、「社会不安」と「特定の恐怖」において、児童期における不安傾向とは異なった表れ方をすることが明らかになった。

【キー・ワード】不安， 幼児， 不安障害

#### Abstract

The purposes of this study were to construct a revised version of rating scale on young children's anxiety tendencies according to the DSM classification of anxiety disorders, revising the previous scale (Nishizawa & Hamaguchi, 2010). By exploratory factor analysis of the anxiety scale, four factors were found. They were "social anxiety", "generalized anxiety", "separation anxiety" and "specific phobia". The high reliability and validity of overall scale were confirmed compared to the previous scale. The cut off point were set up based on the correlation of CBCL

---

\* 現所属：横浜市北部地域療育センター（Yokohama North Area Habilitation Center for Children）

scores. Moreover, investigated the gender and grade difference on young children's anxiety tendencies. Data analysis revealed several significant gender or grade differences as follows: 1) 3-4 and 4-5 year-old children showed higher "social anxiety" than 5-6 year-old children; 2) 5-6 year-old children were higher "generalized anxiety" than 3-4 and 4-5 year-old children; 3) the younger children's grade, the higher "separation anxiety"; 4) girls and 3-4 year-old children were higher "specific phobia" than others. The results of "social anxiety" and "specific phobia" were different in those of elementary school children.

【Key words】 anxiety, young children, anxiety disorders

## 問題と目的

子どもの示す様々な問題の背景には不安があると言われる。不安は、登校拒否 (King & Bernstein, 2001), 選択性緘黙 (齊藤, 2005), 関係性攻撃 (磯部, 2002) といった様々な行動上の問題との関連が指摘されている。さらに、不安の高い子どもはクラスメートから拒否されがちである (Ollendick & King, 1994) など、そのような行動上の問題から、社会的場面における二次的な不適応を生じる可能性も指摘されている。これらより、不安は子どもの発達の過程における不適応の原因ともなることが推測され、子どもの不安について発達臨床心理学的観点から研究を行う必要性が示唆される。

また、児童期における不安障害の有病率は 8~12%程度であるが (Anderson, Williams, McGee, & Silva, 1987), American Academy of Child and Adolescent (1997) の報告などによって、一般児童の中にも不安障害傾向の児童は少なからずいることが知られている。これより、非臨床群における子どもの不安を、不安障害と同様の視点から捉えることで、不安障害の子どもが発症に至るプロセスや関連要因を明らかにすることができ、予防的介入を行うことにも役立つと推測される。従って、子どもの不安を不安障害の観点から捉える試みを行うことが必要であると考えられる。同様の試みはこれまでにいくつかなされており、Spence (1998) は、子どもの不安障害傾向を分類別に査定する尺度として Spence Children's Anxiety Scale (SCAS) を作成した。石川・大田・坂野 (2001) は、これに基づき日本語版 SCAS 改訂版 (SCAS-JR) を作成し、本邦の一般児童でも不安障害分類と対応する不安傾向を示すことを明らかにした。

だが、これらの研究は全て児童期におけるものであり、児童期以前の幼児期における不安傾向を扱った研究は、特にわが国ではほとんど見当たらない。しかし、先述したような、不安が子どもの発達に及ぼす影響を考慮すると、幼児期においてもその不安傾向を児童期と同様に捉え、子どもの不安を発達的な観点から検討していく必要があると考えられる。そこで、筆者は、幼児期における不安傾向を不安障害の観点から多次的に捉えることを通し、子どもの不安傾向を発達の観点から検討する際の示唆を得ること、不安に起因する問題を持つ子どもの援助への示唆を得ることを目指して一連の研究を行っている。

この目的の達成のためには、まず、研究場面と臨床場面の両方において有用性の高い、幼児の不安

傾向を査定することのできる手段が必要となる。そのため、西澤・濱口（2010）では、「幼児用不安傾向評定尺度」の作成を行い、幼児期における不安傾向は、不安障害の分類に従う4分類において多次的に捉えられることを明らかにした。しかし、本尺度のさらなる検討が必要な点として、1. 信頼性のやや低い下位尺度が存在すること、2. 実際の評定者である子どもの保護者による妥当性の検討が行われていないこと、3. 併存的妥当性の検討がやや不十分であることの3点があげられる。そこで、本研究では、これらをさらに詳細に検討し、より有用性の高い尺度を作成することを目指す。

本研究で検討を行うのは以下の3点である。第一に、幼児用不安傾向評定尺度の各下位尺度を構成する項目の再検討を行い、特に信頼性の低かった下位尺度に関しては、DSM-IV・TRにおける不安障害の診断基準等とも照らし合わせながら、追加すべき項目があるかどうか検討を行う。第二に、尺度の適用対象である3～6歳の子どもを持つ保護者と、幼稚園、保育所の保育者に対し、各項目が適切であるかどうかの評定を依頼し、表面的妥当性の検討を行う。第三に、尺度の併存的妥当性について、子どもの問題を測定する尺度として十分な信頼性・妥当性の確認されているCBCL/2-3（日本語版幼児の行動チェックリスト；中田・上林・福井・藤井・北・岡田・森岡，1999）、およびCBCL/4-18（日本語版子どもの行動チェックリスト；井潤・上林・中田・北・藤井・倉本・根岸・手塚・岡田・名取，2001）の不安に関係する下位尺度を用いて検討を行う。類似した検討は、先述の研究でもすでに行っているが、調査のデザインの関係上、十分な確認がなされていない。また、CBCLの得点との関係から、幼児用不安傾向評定尺度の臨床的意義についても検討を行う。以上から、幼児用不安傾向評定尺度を総合的に再検討し、より高い信頼性・妥当性を備えた尺度にすることを本研究の目的とする。さらに、作成された尺度を用いて、幼児期における不安傾向の性差・学年差についても検討を行い、児童期以降において得られている知見と合わせて発達の観点から考察を行う。

## 方 法

**対象者** <サンプル1>茨城県内の8か所の公立・私立の幼稚園・保育所に在籍する3～6歳の子ども644名（平均月齢58.15ヶ月， $SD=10.21$ ）の保護者。

<サンプル2>県内の12か所の幼稚園・保育所に在籍する3～6歳の子ども887名（平均月齢57.94ヶ月， $SD=9.87$ ）の保護者。

<サンプル3>サンプル1の子どもの保育者64名。

**調査時期** 2009年5～7月。

**調査手続き** 幼稚園・保育所に協力を依頼し、同意が得られた施設において、質問紙と保護者向けの依頼文を1部ずつ封筒に入れたものを子どもを通じて配布し、保護者に回答してもらった。回答後は、子どもに持たせるか送迎の際に持参してもらうなどして、クラス担任まで提出してもらう形をとった。保育者を対象とした質問紙については、職員室等に置かせてもらうなどの形をとり、回答後、職員室等に設置した封筒に提出してもらった。いずれも回答は全て無記名で行われ、調査への協力は自由であり、協力しなかった場合にも不利益は一切生じないことを、質問紙及び依頼文に明記した。さらに、保護者を対象とした質問紙については、提出の際は、入っていた封筒に入れて封をもらい、調査

者以外が回答を見ることのできないよう配慮した。

なお、本研究は筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を得て実施された。

**質問紙の構成** 保護者を対象とした質問紙は、以下の構成であった。サンプル 1 用は 1～3、サンプル 2 用は 1, 2 で構成された。

**1. フェイスシート** 記述対象となる子どもの年齢（端数分の月齢を含む）、性別、きょうだい数及び出生順位、幼稚園・保育所への入園（所）の時期、回答者と子どもの関係について記入を求めた。

**2. 幼児用不安傾向評定尺度** 西澤・濱口（2010）の 30 項目を研究に先立ち再度検討し、「特定の恐怖」に 1 項目、「全般性不安」に 3 項目を追加した。それぞれの項目について、子どもについてそのような様子が「全く当てはまらない…1、当てはまらない…2、どちらともいえない…3、当てはまる…4、非常に当てはまる…5」の 5 件法で回答を求めた。さらに、項目の表面的妥当性について検討するため、各項目について、「子どものそのような様子を見たことがないため答えられない」、または「幼児期の子どもの様子を表す文章として不適切である」のどちらかに該当すると感じた場合には、回答欄の右隣に設けた欄にそれぞれ○をつけるよう求めた。

**3. CBCL2-3/4-18（日本語版幼児の行動チェックリスト／日本語版子どもの行動チェックリスト）** 2. の幼児用不安傾向評定尺度の構成概念妥当性を検討することを目的として、CBCL/2-3（日本語版幼児の行動チェックリスト；中田ら，1999）、CBCL/4-18（日本語版子どもの行動チェックリスト；井濶ら，2001）から不安に関係する下位尺度を抜粋して用いた。CBCL/2-3 からは、下位尺度の「引きこもり」（13 項目）、「分離不安」（7 項目）、「不安神経質」（11 項目）の合計 31 項目を使用した。CBCL/4-18 からは、下位尺度の「引きこもり」（9 項目）、「不安/抑うつ」（14 項目）の合計 22 項目（1 項目はどちらの下位尺度にも含まれる）を使用した。なお、質問紙においては、子どもの年齢に応じてどちらかの尺度のみに回答するよう教示した。それぞれの項目について、現在、または過去 6 ヶ月以内の子どもについてそのような様子が、「あてはまらない…1、ややまたはときどきあてはまる…2、よくあてはまる…3」の 3 件法で回答を求めた。

また、サンプル 3 における保育者を対象とした質問紙は、以下の構成であった。

**1. フェイスシート** 回答者の性別、勤務している幼稚園・保育所の別および公立・私立の別、保育者としての勤続年数について記入を求めた。

**2. 幼児用不安傾向評定尺度（項目評定）** 幼児用不安傾向評定尺度の表面的妥当性について検討するため、尺度の各項目について、「幼児期のお子さんが不安を感じている場面を表す文章として不適切」であると感じた場合には、回答欄に○をつけてもらうよう求めた。

## 結 果

以下、1 ではサンプル 1 とサンプル 3 を、2, 3, 6 ではサンプル 1 およびサンプル 2 ( $N = 1531$ ; 平均月齢 58.03 ヶ月,  $SD = 10.01$ ) を、4, 5 ではサンプル 1 をそれぞれ分析対象とした。

### 1. 改訂版幼児用不安傾向評定尺度の各項目の表面的妥当性の検討

発達研究 24 号において詳細は報告済みであるので、ここでは簡潔に要点のみを記載する。

改訂版幼児用不安傾向評定尺度の 34 項目について、保護者により「見たことがなく答えられない」および「幼児期の子どもの様子を表す文章として不適切」と評定された度数と全体 ( $N = 644$ ) に占

める構成比をそれぞれ算出した。各項目の評定された度数について  $\chi^2$  検定を行った結果、表面的妥当性が低いと考えられる項目はなかった。

同様に、保育者により「幼児期の子どもが不安を感じている場面を表す文章として不適切」と評定された度数と全体 ( $N=644$ ) に占める構成比を算出した。各項目の評定された度数について  $\chi^2$  検定を行った結果、「7. 自分や家族に何か悪いことが起きないかと心配する」、「19. 手を洗うこと、掃除、自分で決めた順番で物を置くなど、自分で納得するまできちんとやらなければ気のすまないことがある」の2項目について、表面的妥当性が低い可能性があると考えられた。

## 2. 改訂版幼児用不安傾向評定尺度の因子構造の検討

因子分析に先立ち、改訂版幼児用不安傾向評定尺度の34項目について項目分析を行った結果、「17. 登園時に保護者と離れにくく、泣くことが多い。」の1項目について床効果が疑われたが、最低評定値をつけた人数の割合が全体の50%には満たなかったため、因子分析からは除外しないこととした。

従って、改訂版幼児用不安傾向評定尺度の34項目について、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。西澤・濱口(2010)と同様に、4因子指定として分析を行ったところ、従来とは一部異なる因子構造を持つ4因子が抽出されたが、いずれも解釈可能であったため、従来と同様に4因子解を採用した。その後、因子負荷量が.40に満たなかった6項目を除外し、残った28項目について再度4因子基準による同様の因子分析を行った。初期の固有値は、第1因子から順に7.11, 2.80, 1.74, 1.36であり、4因子の累積寄与率は37.5%であった。この結果を表1に示す。

第1因子に負荷量の高かった項目は、「28. 幼稚園・保育園ではおしゃべりなほうだ。」(逆転項目)、など10項目であり、ほぼ従来の尺度で「社会不安」に含まれていた項目であった。従って、この因子は「社会不安」と命名された。第2因子に負荷量の高かった項目は、「17.何か悪いことが起きるのではないかと心配することが多い。」など7項目であり、全て、従来の尺度で「全般性不安」に含まれていた項目と、本研究で新たに「全般性不安」に追加した項目であった。従って、この因子は「全般性不安」と命名された。第3因子に負荷量の高かった項目は、「18. 登園時に保護者と離れにくく、泣くことが多い。」など7項目であり、全て従来の尺度で「分離不安」に含まれていた項目であった。従って、この因子は「分離不安」と命名された。第4因子に負荷量の高かった項目は、「26. お化けや怪獣など、想像上のものを恐がる。」など4項目であり、全て従来の尺度で「特定の恐怖」に含まれていた項目であった。従って、この因子は「特定の恐怖」と命名された。

なお、項目の表面的妥当性の検討において、項目7および19の表面的妥当性の低さが疑われていたが、項目7については、天井効果や床効果がみられなかったことと、因子分析の結果第2因子に.68という比較的高い負荷量を示したことから、本尺度を構成する項目としては妥当であると判断し、除外しないこととした。項目19については、因子分析において特定の因子に.40以上の負荷量を示さなかったことも踏まえ、除外することとした。

表1 改訂版幼児用不安傾向評定尺度の因子パターン行列(主因子法, プロマックス回転)

	F1	F2	F3	F4	共通性	平均値	SD
<b>第1因子: 社会不安 (<math>\alpha=.86</math>)</b>							
28 幼稚園・保育園ではおしゃべりなほうだ。(*)	<b>.82</b>	-.06	-.26	-.02	.44	2.53	0.88
13 担任の保育者に対して、自分から話しかけることが多い。(*)	<b>.69</b>	-.07	-.17	-.07	.33	2.52	0.87
2 みんなの前で話をすることが苦手である。	<b>.68</b>	-.05	.03	-.01	.47	2.77	1.00
11 なかなか遊びに入らず、友達のしているのを見ていることが多い。	<b>.62</b>	.11	.07	-.03	.50	2.38	0.95
29 仲の良い友達以外の友達と話しているのをあまり見かけない。	<b>.57</b>	.13	-.06	-.08	.32	2.51	0.87
20 今まで経験したことのない行事や遊びでも、ためらわずすぐに入り込める。(*)	<b>.57</b>	.01	.05	.05	.39	2.78	0.86
7 初めて会う人に話しかけられても、答えられることが多い。(*)	<b>.50</b>	-.20	.07	.03	.26	2.86	1.02
3 何か新しいことを始めるとき、しりごみしてなかなか始められない。	<b>.49</b>	.10	.19	.03	.49	2.73	0.98
4 園全体やクラスでの活動の際には、緊張して不安そうな表情になる。	<b>.49</b>	.19	.14	-.07	.45	2.32	0.91
26 行事や当番など、新しい活動や状況に慣れるのに時間がかかる。	<b>.43</b>	.07	.16	.06	.37	2.53	0.85
<b>第2因子: 全般性不安 (<math>\alpha=.79</math>)</b>							
16 何か悪いことが起きるのではないかと心配することが多い。	-.15	<b>.80</b>	.02	-.02	.58	2.06	0.81
9 自分や家族に何か悪いことが起きないかと心配する。	-.17	<b>.68</b>	-.01	-.03	.39	2.20	1.00
34 いろいろなことを、くよくよ気にすることが多い。	.05	<b>.59</b>	.04	.02	.41	2.24	0.84
10 失敗や間違いをしてしまうのではないかと心配する。	.16	<b>.58</b>	.00	-.04	.41	2.59	0.96
31 神経質や心配性だと感じることもある。	.20	<b>.49</b>	-.04	.10	.38	2.68	1.06
30 友達からどう見られているかを気にすることが多い。	.03	<b>.47</b>	-.02	.01	.23	2.11	0.85
15 何か気になることがあると、大人にたびたび確かめなければ気がすまないことがある。	-.01	<b>.45</b>	-.04	.15	.25	2.93	1.03
<b>第3因子: 分離不安 (<math>\alpha=.78</math>)</b>							
17 登園時に保護者と離れにくく、泣くことが多い。	-.14	.05	<b>.64</b>	-.16	.27	1.76	0.90
1 保護者から離れると、泣いたり恐がったりする。	.02	.00	<b>.63</b>	.00	.41	2.37	1.01
23 特に理由はなさそうなのに、恐がって泣いたり保護者から離れにくくなる 경우가よくある。	-.10	.16	<b>.59</b>	-.05	.36	1.88	0.74
24 初めての場所に行ったとき、なかなか保護者のそばを離れようとしなない。	.19	-.10	<b>.59</b>	.10	.55	2.56	0.99
29 保護者にまわりついたり、後追いをすることはあまりない。(*)	.01	-.09	<b>.56</b>	-.04	.27	2.80	0.90
22 健康診断や予防注射の際には落ち着きがなくなり、保護者から離れなくなったり泣いたりする。	-.13	.00	<b>.54</b>	.05	.24	2.40	0.97
21 たくさん人が集まる場所に行くと、保護者から離れなくなることがよくある。	.24	-.11	<b>.50</b>	.09	.47	2.77	0.99
<b>第4因子: 特定の恐怖 (<math>\alpha=.65</math>)</b>							
25 お化けや怪獣など、想像上のものを恐がる。	-.08	.00	.02	<b>.60</b>	.34	3.22	1.03
33 雷や花火など大きな音を恐がる。	.00	.01	-.08	<b>.57</b>	.32	2.87	1.09
12 暗いところを恐がる。	.02	-.02	-.02	<b>.57</b>	.29	3.30	1.06
18 地震や台風などの自然災害を恐がる。	-.09	.13	-.06	<b>.54</b>	.31	2.78	1.08
因子間相関							
	F1						
	F2	.36					
	F3	.66	.49				
	F4	.26	.44	.51			

(\*)は逆転項目  
因子負荷量を口で囲んだ項目は、各下位尺度の構成項目であることを意味する。

### 3. 改訂版幼児用不安傾向評定尺度の信頼性の検討

改訂版幼児用不安傾向評定尺度の尺度全体と各因子について、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、尺度全体(28項目)で $\alpha=.88$ 、第1因子(「社会不安」、10項目)が $\alpha=.85$ 、第2因子(「全般性不安」、7項目)が $\alpha=.79$ 、第3因子(「分離不安」、7項目)が $\alpha=.79$ 、第4因子(「特定の恐怖」、4項目)が $\alpha=.65$ であり、第1、第2、第3因子では十分な信頼性が確認された。第4因子ではやや信頼性が低い、これは項目数の少なさや、他の因子に比べ因子名の示す概念が広いことが一因であると考えられよう。尺度全体では十分な信頼性が示されており、十分使用に耐える尺度と考えられた。

以上より、各因子について十分な信頼性が確認されたため、4因子から下位尺度を構成し、それぞれ

れの因子を構成する項目の評定値の平均点を算出して下位尺度得点とした。

#### 4. 改訂版幼児用不安傾向評定尺度の併存的妥当性の検討

改訂版幼児用不安傾向評定尺度の併存的妥当性を検討するため、以下の分析を行った。

3歳児については、まず、CBCL/2-3 (中田ら,1999) の「引きこもり」、「分離不安」、「不安神経質」の各下位尺度における評定値の平均点を算出し、当該下位尺度の下位尺度得点とした。Cronbach の  $\alpha$  係数は、「引きこもり」が  $\alpha=.73$ 、「分離不安」が  $\alpha=.76$ 、「不安神経質」が  $\alpha=.69$  であり、信頼性が確かめられた。さらに、改訂版幼児用不安傾向評定尺度の下位尺度得点と CBCL/2-3 の各下位尺度得点との間で Pearson の積率相関係数を算出した。その結果、「社会不安」では、「引きこもり」( $r=.44, p<.01$ )、「分離不安」( $r=.69, p<.01$ ) との間において有意な中程度の正の相関が、「不安神経質」( $r=.31, p<.01$ ) との間において有意なやや低い正の相関がみられた。「全般性不安」では、「不安神経質」( $r=.62, p<.01$ ) との間において有意な中程度の正の相関が、「引きこもり」( $r=.49, p<.01$ )、「分離不安」( $r=.43, p<.01$ ) との間において有意なやや低い正の相関がみられた。「分離不安」では、「分離不安」( $r=.59, p<.01$ ) との間に有意な中程度の正の相関が、「引きこもり」( $r=.30, p<.01$ )、「不安神経質」( $r=.33, p<.01$ ) との間において有意なやや低い正の相関がみられた。「特定の恐怖」では、「分離不安」( $r=.22, p<.05$ )「不安神経質」( $r=.28, p<.01$ ) との間においてそれぞれ有意な低い正の相関がみられた。これを表 2 に示す。

表 2 改訂版幼児用不安傾向評定尺度と CBCL/2-3 および CBCL/4-18 の下位尺度間相関

不安傾向 評定尺度	CBCL					
	3歳児			4, 5, 6歳児		
	引きこもり	分離不安	不安神経質	引きこもり	不安/抑うつ	
社会不安	.44 ** (102)	.69 ** (101)	.31 ** (95)	.47 ** (440)	.25 ** (440)	
全般性不安	.49 ** (80)	.43 ** (80)	.62 ** (75)	.42 ** (424)	.58 ** (420)	
分離不安	.29 ** (112)	.59 ** (111)	.33 ** (102)	.35 ** (476)	.34 ** (470)	
特定の恐怖	.18 (105)	.22 * (103)	.28 ** (97)	.17 ** (472)	.28 ** (466)	

( )内はN \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

4, 5, 6歳児については、CBCL/4-18 (井瀬ら,2001) の下位尺度である「引きこもり」、「不安/抑うつ」の各下位尺度における評定値の平均点を算出し、当該下位尺度の下位尺度得点とした。Cronbach の  $\alpha$  係数は、「引きこもり」が  $\alpha=.65$ 、「不安/抑うつ」が  $\alpha=.78$  であり、信頼性が確かめられた。さらに、改訂版幼児用不安傾向評定尺度の下位尺度得点と CBCL/4-18 の各下位尺度得点との間で Pearson の積率相関係数を算出した。その結果、「社会不安」では、「引きこもり」( $r=.47, p<.01$ )、「不安神経質」( $r=.31, p<.01$ ) との間において有意なやや低い正の相関が、「不安/抑うつ」( $r=.25, p<.01$ ) との間において有意な低い正の相関がみられた。「全般性不安」では、「引きこもり」( $r=.42, p<.01$ )、「不安/抑うつ」( $r=.58, p<.01$ ) との間においてそれぞれ有意な中程度の正の相関がみられた。「分離不安」では、「引きこもり」( $r=.35, p<.01$ )、「不安/抑うつ」( $r=.34, p<.01$ ) との間においてそれぞれ有意なやや低い正の相関がみられた。「特定の恐怖」では、「引きこもり」( $r=.18, p<.01$ )、「不安/抑うつ」( $r=.28, p<.01$ ) との間においてそれぞれ有意な低い正の相関がみられた。これを同様に

表 2 に示す。

以上より、改訂版幼児用不安傾向評定尺度の併存的妥当性が確認されたと考えられた。

### 5. 改訂版幼児用不安傾向評定尺度の臨床的基準の検討

改訂版幼児用不安傾向評定尺度の下位尺度得点が臨床的に意味を持つ目安を検討するため、各下位尺度の合計得点と、CBCL/2-3 および CBCL/4-18 の各下位尺度の合計得点を用いて、以下の分析を行った。なお、CBCL/2-3 および CBCL/4-18 については、本研究では 1~3 の 3 件法としたが原版では 0~2 の 3 件法であるため、合計得点から項目数を減算する処理を行った。

3 歳児については、中田ら (1999) において、それぞれの合計得点が「引きこもり」は 6 点以上、「分離不安」は 10 点以上、「不安神経質」は 8 点以上の場合に境界域であるとされているため、3 下位尺度全てにおいて境界域以上の得点を示した者を抽出した。そのサンプルにおいて改訂版幼児用不安傾向評定尺度の各下位尺度の合計点の平均値を算出した結果、「社会不安」では 26.72 ( $SD=7.00$ )、「全般性不安」では 17.97 ( $SD=3.36$ )、「分離不安」では 17.71 ( $SD=4.92$ )、「特定の恐怖」では 12.20 ( $SD=2.73$ ) であった。これを表 3 に示す。

表 3 CBCL/2-3 および CBCL/4-18 において境界域以上の得点を示した対象者の改訂版幼児用不安傾向評定尺度の合計点の平均値・標準偏差と得点分布

	N	平均値	SD	最小値	最大値	範囲
<b>3歳児</b>						
社会不安	39	26.72	7.00	15	45	10~50
全般性不安	38	17.97	3.36	9	24	7~35
分離不安	41	17.70	4.92	10	30	7~35
特定の恐怖	40	12.20	2.73	7	17	4~20
<b>4, 5, 6歳児</b>						
社会不安	22	30.86	7.27	23	47	10~50
全般性不安	23	22.57	3.06	17	28	7~35
分離不安	22	19.36	4.20	13	30	7~35
特定の恐怖	23	14.13	3.47	8	20	4~20

4~6 歳児については、井瀬ら (2001) において、4~11 歳では男女とも、それぞれの合計得点が「引きこもり」は 5 点以上、「不安/抑うつ」は 9 点以上の場合に境界域であるとされているため、両方の下位尺度において境界域以上の得点を示した者を抽出した。そのサンプルにおいて改訂版幼児用不安傾向評定尺度の各下位尺度の合計点の平均値を算出した結果、「社会不安」では 30.86 ( $SD=7.27$ )、「全般性不安」では 22.57 ( $SD=3.06$ )、「分離不安」では 19.36 ( $SD=4.20$ )、「特定の恐怖」では 14.13 ( $SD=3.47$ ) であった。これを同様に表 3 に示す。

以上より、改訂版幼児用不安傾向評定尺度の各下位尺度における合計得点が、3 歳児では「社会不安」が 27 点以上、「全般性不安」、「分離不安」が 18 点以上、「特定の恐怖」が 13 点以上の場合、4~6 歳児では「社会不安」が 31 点以上、「全般性不安」が 23 点以上、「分離不安」が 20 点以上、「特定の恐怖」が 15 点以上である場合に、不安傾向の高さが臨床的に意味を持つ可能性があることが明らかになった。



## 6. 幼児の不安傾向の性別・年齢における差異

改訂版幼児用不安傾向評定尺度の各下位尺度得点を従属変数とした性別(2)×学年(3)の2要因被験者間計画の分散分析を行った。その結果を表4に示す。なお、年少児とは4月の進級時に3歳である子ども、年中児とは同じく4歳である子ども、年長児とは同じく5歳である子どもを指す。

表4 改訂版幼児用不安傾向評定尺度の下位尺度得点の平均値と性別・学年の分散分析結果

	男子			女子			性差 F	学年差 F	交互作用 F
	年少児	年中児	年長児	年少児	年中児	年長児			
社会不安	178	249	236	189	278	281	2.65 <i>n.s.</i>	6.56** 年長児<年少児、年中児	0.70 <i>n.s.</i>
	2.72 (0.65)	2.63 (0.63)	2.54 (0.62)	2.61 (0.59)	2.61 (0.61)	2.51 (0.55)			
全般性不安	170	248	239	166	276	277	0.50 <i>n.s.</i>	7.71** 年少児、年中児<年長児	0.54 <i>n.s.</i>
	2.35 (0.59)	2.36 (0.63)	2.52 (0.70)	2.32 (0.60)	2.39 (0.59)	2.46 (0.60)			
分離不安	192	265	245	195	285	290	1.12 <i>n.s.</i>	35.55** 年長児<年中児<年長児	0.51 <i>n.s.</i>
	2.55 (0.64)	2.39 (0.60)	2.17 (0.57)	2.52 (0.63)	2.44 (0.62)	2.24 (0.56)			
特定の恐怖	191	265	243	185	288	289	16.30** 男<女	4.90** 年長児<年少児	0.70 <i>n.s.</i>
	3.05 (0.75)	2.98 (0.70)	2.92 (0.73)	3.25 (0.75)	3.11 (0.77)	3.06 (0.74)			

上段の数値はN、中段の数値は平均値、()内は標準偏差 \*\* $p<.01$

「社会不安」においては、学年の主効果が認められた( $F(2,1405)=6.56, p<.01$ )。そこで、Tukey法を用いた多重比較を行ったところ、年少児は年長児よりも( $p<.01$ )、また年中児は年長児よりも( $p<.05$ )高い得点を示した。「全般性不安」においては、学年の主効果が認められた( $F(2,1370)=7.71, p<.01$ )。そこで、Tukey法を用いた多重比較を行ったところ、年長児は年少児よりも( $p<.01$ )、また年長児は年中児よりも( $p<.01$ )高い得点を示した。「分離不安」においては、学年の主効果が認められた( $F(2,1466)=35.55, p<.01$ )。そこで、Tukey法を用いた多重比較を行ったところ、年少児は年中児、年長児よりも(いずれも $p<.01$ )、また年中児は年長児よりも( $p<.01$ )高い得点を示した。「特定の恐怖」においては、性別の主効果が認められた( $F(1,1466)=16.30, p<.01$ )。そこで、Tukey法を用いた多重比較を行ったところ、女子は男子よりも( $p<.01$ )、高い得点を示した。また、同様に学年の主効果も認められた( $F(2,1466)=4.90, p<.01$ )。そこで、Tukey法を用いた多重比較を行ったところ、年少児は年長児よりも( $p<.01$ )高い得点を示した。

なお、交互作用はいずれの下位尺度においてもみられなかった。

## 考 察

### 1. 改訂版幼児用不安傾向評定尺度の信頼性・妥当性の検討

本研究では、西澤・濱口(2010)において作成した、幼児用不安傾向評定尺度の再検討を行った。従来の幼児用不安傾向評定尺度(30項目)の各下位尺度を構成する項目を再度検討し、4項目を追加した上で、保護者および幼稚園・保育所の保育者に対し、全尺度項目の表面的妥当性について評定を

依頼した結果、尺度の表面的妥当性が確認された。そこで、因子分析によって尺度の構造を検討した結果、従来の尺度と同様の「F1:社会不安」(10項目)、「F2:全般性不安」(7項目)、「F3:分離不安」(7項目)、「F4:特定の恐怖」(4項目)の4因子が得られた。

従来の尺度と比較してみると、第2因子と第3因子の順番が入れ替わった他、「F1:社会不安」と「F3:分離不安」の2因子の間で項目の移動がいくつかみられた。しかし、移動のあった項目はいずれも、従来の尺度作成時に理論的に項目を分類した際には今回の移動先の因子に含まれていたものであった。本研究においては、従来の尺度を作成した際の3倍近い数のサンプルによって因子分析を行ったため、より理論に即した安定した因子構造が得られたと考えられる。また、項目選定の際の因子負荷量基準を、従来の.35から.40に切り上げたため、全体的な項目数としては減少したが、Cronbachの $\alpha$ 係数により信頼性の検討を行った結果、各下位尺度および尺度全体において、いずれも従来の尺度より高い値が得られ、より高い信頼性を備えた尺度であることが確認された。

さらに、CBCL/2-3およびCBCL/4-18の不安に係する下位尺度との相関分析によって併存的妥当性の検討を行った結果、「社会不安」、「全般性不安」、「分離不安」においてはCBCLのいずれの下位尺度とも.25~.69の範囲で有意な正の相関が得られ、十分な併存的妥当性が確認された。特に相関の高かった箇所についてみると、「社会不安」では、CBCL/2-3の「分離不安」との間に $r=.69$  ( $p<.01$ )という高い値が得られ、両者は関連の深いものであると考えられる。また、「全般性不安」では、CBCL/2-3の「不安神経質」、CBCL/4-18の「不安/抑うつ」との間に比較的高い値が得られており、神経質、抑うつ傾向と関連のある不安傾向であることが確認された。「分離不安」では、CBCL/2-3の「分離不安」と $r=.59$  ( $p<.01$ )という比較的高い値が得られ、臨床的な意味合いを持つ「分離不安」としての性質が確認されたと考えられる。なお、「特定の恐怖」では、いずれも低い値であったことは、その性質上やむを得ない結果であろうが、下位尺度得点の平均値が最も高かったこと、児童用の尺度SCAS-JR(石川ら, 2001)においても「特定の恐怖」因子は存在していることから、子どもの不安を発達の観点から捉えていく上で、尺度に含める意義は大きいと考えられる。

以上より、本研究においては、従来の尺度よりもより高い信頼性・妥当性を備えた改訂版幼児用不安傾向評定尺度を作成することができたと結論づけられよう。

## 2. 改訂版幼児用不安傾向評定尺度の有用性と限界

本尺度は、幼児の不安傾向を不安障害の下位分類に基づいて多次元的に捉えることができる点に大きな特徴がある。本尺度は、児童期以降における研究においてはすでに行われているこの試みを、幼児期においても行うことを目指して作成されたものであり、発達の視点に立って子どもの不安傾向を見ていく際に非常に有用であると考えられる。サンプル数を増やして行った本研究においても、尺度が従来と同様に不安障害の下位分類に基づく4因子に収束したことから、健常群の幼児が感じている不安も、不安障害の下位分類に従って多次元的に捉えられることが改めて確認されたと言える。さらに、本研究においては、尺度得点が臨床的に意味を持ちうる基準も定めることができている。今回は分析対象となった人数が非常に少なかったため、信頼性のあるカットオフポイントの設定に至るまでには、今後更なる検討が必要であろう。その上で、将来的には、本尺度を介入を必要としている子どものスクリーニングの手段としても活用することが期待される。

また、本尺度は、保護者評定の尺度という簡便な形で、幼児の不安傾向を測定することができる点にも特徴がある。本尺度を用いることで、幼児の不安傾向をより簡便に査定することが可能となり、不安傾向の高い子どもの早期発見と必要に応じた早期介入につながると考えられる。だが、保護者の協力が得られなければ使用できないために、保育者評定などの併用も検討し、さらなる実用性の向上に努める必要もあるだろう。

本尺度の有用性を高め、研究場面と臨床場面の両方において幅広く活用していけるものにできるよう、今後さらなる検討を進めていくべきである。

### 3. 幼児の不安傾向の性別・学年における差異

幼児の不安傾向について、性別・学年による差異の検討を行った結果、「社会不安」においては、年少児、年中児の方が年長児よりも高いという結果が得られた。これは、児童青年期を対象とした Essau, Conradt & Petermann (1999) などとは反対の知見である。また、この2研究においては性差も指摘されているが、本研究および西澤・濱口 (2010) においても差異はみられなかった。幼児期における社会不安傾向は、まだはっきりと分化・具現化しておらず、幼稚園・保育所などの社会的場面への参入に伴って一時的に高くなるのだと考えられる。幼児期において社会不安傾向の高い子どもについては、ある程度長期的な視点に立って観察を行いながら、支援について検討する必要があるだろう。

「全般性不安」は、年長児の方が年少児、年中児よりも高いという結果が得られたが、この結果は西澤・濱口 (2010) において、高年齢児が低年齢児よりも高いという結果が一部に認められたことと一致する。これは、加齢に伴う知能や社会性の発達によって、様々な事象に関する因果関係を理解したり、起こり得る事象を予期できるようになることの表れであると考えられる。しかし、Kendall, Krain, & Treadwell (1999) は、親や教師は全般性不安障害の子どもの症状を成熟の表れであるとみなしがちであるために、治療を先延ばしにしてしまうことは珍しくないとしており、この点に関する判断は注意してなされるべきであると言える。

「分離不安」は、学年が低いほど高くなっており、西澤・濱口 (2010) と同様の結果であった。これは児童を対象とした石川・坂野 (2005) とも一致する。また、石川・坂野 (2005) などでは性差が指摘されているが、本研究においては西澤・濱口 (2010) と同様差異は認められなかった。幼児期における分離不安は、発達の過程で多くの子どもに経験されるものであり、それが臨床的な意味を持つかどうか判断するのは難しいと考えられる。しかし、Silove, Harris, Morgan, Boyce, Manicavasager, Hadzi-Pavlovic & Wilhelm (1995) などは、子どもの頃の分離不安障害が後の社会不安障害の発症に関連していることを指摘しており、本研究においても「社会不安」と「分離不安」の間には高い因子間相関がみられたことから、幼児期の分離不安の高さは後の不適応につながりかねず、注意してみていくことが必要であると考えられるであろう。

「特定の恐怖」は、男子よりも女子の方が高いという結果は、児童を対象とした石川・坂野 (2005) などの他、子どもの恐怖対象を測定する尺度である FSSC-R を作成した Ollendick (1983) とも一致しており、この傾向は、幼児期から児童期まで共通するようである。また、先述の全ての研究において学年差は認められていないが、本研究では年長児よりも年少児が高いという結果が得られた。これ

は、幼児期では、年齢を経るにつれて多くの経験をする中で、恐怖を感じる対象が減少していくためであると考えられるであろう。

以上より、幼児期の不安傾向は、児童期以降と同様に、性別や学年によって表れ方が異なってくるものであり、その発達段階を考慮しながら支援を行っていくべきであると言える。

#### 4. 今後の課題

今後は、作成された尺度を用いて、性差・年齢差の横断的モデルにとどまらず、縦断的な観点から子どもの不安傾向を発達的に検討する予定である。さらに、不安傾向に影響を与える要因として、デモグラフィック要因だけでなく子どもの気質や養育者の養育行動などを想定し、検討を行いたいと考えている。

## 引用文献

- American Academy of Child and Adolescent Psychiatry (1997). Practice parameters for the assessment and treatment of children and adolescents with anxiety disorder. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **36**,69-84.
- Anderson,J.C.,Williams,S.,McGee,R., & Silva,P.A. (1987). DSM-III disorders in preadolescent children. *Archives of General Psychiatry*, **44**,69-76.
- Essau, C.A.,Conradt,J, & Petermann,F. (1999). Frequency and comorbidity of social phobia and social fears in adolescents. *Behaviores Therapy*, **37**,831-843.
- 井淵知美・上林靖子・中田洋二郎・北道子・藤井浩子・倉本英彦・根岸敬矩・手塚光喜・岡田愛香・名取宏美 (2001). Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発 小児の精神と神経, **41**(4), 243-252.
- 石川信一・大田亮介・坂野雄二 (2001). 日本語版 SCAS (スペイン児童用不安尺度) 作成の試み 早稲田大学臨床心理学研究, **1**(1), 75-84.
- 石川信一・坂野雄二 (2005). 児童における不安症状と行動的特徴の関連—教師の視点からみた児童の社会的スキルについて— カウンセリング研究, **38**, 1-11.
- 磯部美良 (2002). 幼児の関係性攻撃と社会的スキルに関する短期縦断的研究 広島大学大学院教育学研究科紀要, **3**(51), 249-255.
- Kendall,P.C.,Krain,A., & Treadwell,K.R.H. (1999). Generalized anxiety disorders. In R.T.Ammerman,M.Hersen, & C.G.Last (Eds.) ,*Handbook of prescriptive treatments for children and adolescents* (2nd ed.) . Needham Heights,MA:Allyn & Bacon,pp.1155-1171.
- King,N.,J., & Bernstein, G.A. (2001). School refusal in children and adlescents:A review of the past 10 years. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **40**,197-205.
- 中田洋二郎・上林靖子・福井知美・藤井浩子・北道子・岡田愛香・森岡由起子 (1999). 幼児の行動チェックリスト (CBCL/2-3) の日本語版作成に関する研究 小児の精神と神経, **39**(4), 305-316.

- 西澤千枝美・濱口佳和 (2010). 幼児用不安傾向評定尺度の作成—不安傾向と社会的スキルならびに問題行動との関連の検討— *カウンセリング研究*, **43**(2), 150-160.
- Ollendick, T.H. (1983). Reliability and validity of the Revised Fear Survey Schedule for Children (FSSC-R). *Behaviour Research and Therapy*, **21**, 685-691.
- Ollendick, T.H., & King, N.J. (1994). Fears and their level of interference in adolescents. *Behavior Research and Therapy*, **32**, 635-638.
- 齊藤万比古 (2005). 精神科医の立場からみた子どもの不安症 久保木富房・不安・抑うつ臨床研究会 (編) *子どもの不安症 小児の不安障害と心身症の医学* 日本評論社 pp.15-30.
- Silove, D., Harris, M., Morgan, A., Boyce, P., Manicavasagar, V., Hadzi-Pavlovic, D., & Wilhelm, K. (1995). Is early separation anxiety a specific precursor of panic-agoraphobia?: A community sample. *Psychological Medicine*, **25**, 405-411.
- Spence, S.H. (1998). A measure of anxiety symptoms among children. *Behavior Research and Therapy*, **36**, 545-556.

## 謝 辞

本研究を実施するにあたり多大なご指導を賜りました、筑波大学大学院人間総合科学研究科濱口佳和教授に心より感謝いたします。また、調査の実施にご理解とご協力をいただきました幼稚園・保育所の先生方、保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

